

「イソップ寓話」翻訳・翻案の特異性 — “蟻と蟬の事” の事例検証から —

谷出 千代子

仁愛大学人間生活学部

Specificity of Translation and Adaptation of Aesop's Fables — From Case Verification of “The Ant and The Cicada” —

Chiyoko TANIDE

Faculty of Human Life, Jin-ai University

イソップ寓話「蟻と蟬の事」, または「蟻と蝻の事」など底本とする原話によって表記やプロットの展開が異なるこれらの話は, 日本に最も早く入ってきた外国の物語である。

そこで, 天草本, 古活字本, 影印本などと称される底本としてのイソップ寓話の特色がどのように時代と共に流布し人々に扱われてきたか, さらには読者層の相違によって翻訳者はいかに翻刻を重ねたか, 翻訳のもつ役割を吟味してきたかなど, 文章表現と絵画描写(挿絵)を通して, 入手, 管見の可能となった明治期, 大正期発刊本に限って分析検証してきた。

結果として, 翻刻や翻訳にこだわりを持ち, 用語使用に対しても厳しい態度で臨んでいると思われる物語に向き合うことができた。文化的には日本という国柄の精神性を重視し, 大和魂に固守する余り, 今日的時代性から判断すると, 諧謔的な想像性と創造性に拘りと時代性を受容できた検証であった。

キーワード: 天草本 古活字本 萬治版 翻訳と翻案 子ども読者

1. 問題の所在

明治・大正・昭和期に発刊されたもので入手できた「イソップ寓話」101種中に, 「蟻と蟬の事」¹の話は63種掲載されている。62.4%に上る採択率である。日本では「兎と亀」や「北風と太陽」と共に良く知られた話であることは周知のとおりだ。

この話は現代にいたってもなお多くの作家や翻訳者, 再話者等により譬え話として, 変化に富んだプロットで構成されながら伝えられ, まさに人口に膾炙するほどの要素を持つことは確かである。

さらに, 中務哲郎氏²は「寓話には, 登場人物や話の内容が同一でも, そこから導きだされる教訓だけが変化する場合がある」とし, 「伝承の過程でその教訓部分」が変化する可能性があることを示唆する。確かに

この寓話における訓蒙の意図するところについても特異性が多々見受けられる。

これら著作を手掛けた著述人の意識には, 西洋文化の継承の有無, 読者対象認識の有無, 翻訳に対する感覚の軽重等, 話の表現に様々な要因が伴い差異が生じるように思われる。

そこで「蟻と蟬の事」の事例を通して, 寓話のもつ簡潔に物語のプロットを伝え訓蒙を添書きする原話形態が, どのように翻訳・翻案を重ね, 現代にイソップ寓話としての要素を表現・保持してきたかについて分析検証しようと思う。

2. 手続き

当稿では, その時代の教科書を除く, 明治期17種, 大正期14種の2時代に発刊された「イソップ寓話」の

中から、「蟻と蟬の事」31種の話を対象とする。

原話の型は、次の類を底本として比較検証する。

- 1) 天草版伊曾保物語 イソポのハブラス1593³ (図1)
 - 1) 大英博物館所蔵 福島邦道解説
 - 2) 古活字本 伊曾保物語 国立国会図書館所蔵本影印 伊曾保物語下⁴ (図2)
 - 3) 萬治版 伊曾保物語下 伊藤三右衛門開板 1659⁵ (図3)
- 当該書については、挿絵の比較においても対象とした。また、挿絵の検証では、『絵入教訓近道』の入手が困難だったため、武藤禎夫『絵入り伊曾保物語を読む』⁶ (図4) を参考に用いた。
- 4) 渡部知新蔵『通俗伊蘇普物語』明治五壬申官許⁷ (図5)
 - 5) Esope fables, texte etabli et traduit par Emil Chambry, Paris, 1927ギリシア原文／山本光雄訳『イソップ寓話集』(通称シャンプリ校訂版)⁸ (図6)
 - 6) 栗野忠雄譯述『伊蘇普物語 直譯講義 全』⁹ (図7)

以上の底本を以って

- ①タイトルの表記の仕方
- ②物語描写の仕方
- ③訓蒙表現の在り方
- ④挿絵、ないし絵本の絵画描写の様相

について比較を試みる。

3. 底本の描写分類

- 1) 天草版 伊曾保物語 (イソポのハブラス) 1593

図1のごとく、天草のイエズス会学林で刊行されたもので、ローマ字表記である。新村出が大英図書館に懇願の末の翻字本もあるということである。

題名：蟬と、蟻との事。

筋立て：冬のある日、数多の蟻が五穀を日に曝しているとき、蟬が訪れこれを乞うた。蟻は「夏や秋に何をしていたか」と問う。蟬は「吟曲に紛れ、暇を得ず、営みもせず」と。そこで蟻は「夏秋の遊びのごとく今も秘曲を尽くすが良い」とさんざん嘲り、少しの食をとらせて蟬を戻した。(傍線筆者)

訓蒙：下心。人は力の尽きぬうちに未来の務めをすることが肝要。少しの力と暇一有るとき、慰み事をするものは必ず難を受けることだろう。

- 2) 古活字本 伊曾保物語 (図2)

天正年間の成立か？と記されるように、明確な発刊年も訳者も定かではない。漢字仮名交り文表記である。題名：ありとせみの事 (日本古典文学大家本は「蟻と蟬の事」と漢字仮名交り表記)

筋立て：春、夏が過ぎ、秋も深まり、冬の頃、日うらうらなるとき、蟻餌食を干す。蟬が来て「あら素晴らしい。冬のさなか豊かな餌食。我に少しくれないか」蟻は答えて「春秋には何を営んでいたのか」と。蟬は答えて「こずえの鳴るに答えて歌を歌うのに忙しくて暇のないまま過ぎてしまった」と。蟻は「歌に凝るとついには舞にも進んでしまう。何とも卑しい餌食を求めて何としよう」といって穴に入ってしまった。

訓蒙：人は力が尽きぬうちに自分の生業を務めること。豊かなとき儉約しておかないと貧しくなったとき後悔する。幼少期 (子ども時代) に学んでおかないと、年をとってから後悔する。酔って乱れていると、醒めたとき更に後悔する。

- 3) 萬治板 伊曾保物語下 (図3) は 上中下三冊の絵入り大型本である。

題名：ありとせみの事

筋立て：ほとんど、2) 古活字本に類似している。ただ、①古活字本より漢字表記部分が多出する。②古活字本と対比すると、文章中5箇所において助詞が削除されている。例えば、「ふゆざれまでも」(古活字本)が、萬治本では「ふゆざれまで」の表記となっている。意味上は全く不都合はなく、むしろ萬治本の方がリズムをとりながら軽快な読み口調となる印象を受ける。訓蒙：古活字本と同じだが、最後の一行「返々も是を思へ。」の念押しがない。

挿絵：蟻、及び蟬は擬人化されずに線画で描写されている。さらに、武藤禎夫『絵入り伊曾保物語を読む』では、為永春水面の半獣半人が中世から江戸期の日本武将の姿で描かれる。

- 4) 渡部所蔵に至って漸く「伊蘇普物語 (イソップ物語)」と書名が西欧書に接近した表記となる。(図5)
- 題名：蟻とキリ蝨

ここでキリギリスの登場となる。

筋立て：冬枯れの頃の暖かな日、多くの蟻達が集まって夏に収めた餌を干す。飢え疲れたきりぎりす、よろよろとやってきて、命を繋ぐため餌を分けてと乞う。

古老の蟻,「きりぎりすよ, 夏中何をして暮らしたのか, なぜ食に困るのか」と。「この夏面白かった. 花に戯れ, 葉に眠り, 露を口に, 薄衣を身に纏い, 歌を歌い舞を待っていた」と. 言いきらぬうちに蟻は笑って, 協力することはない. 私たちは夏の炎天下, 背を曝して餌を運び冬に備えた. だから今安心できる. 夏中舞歌って徒に日を過ごしたものは, 冬に飢えるはずだ. 判っていることだと答えた.

訓蒙: 夏に稼いだ余徳は冬にその結果が出るのですぞ.

5) 山本光雄訳はシャンブリ版に準ずる.

題名: ①蟻と甲虫

②蟬と蟻たち

の2種が掲載されている.

筋立て: ①夏に蟻は小麦や大麦を集めて冬の食物に蓄えていた. 甲虫は蟻の勤勉さを見て他の動物達も仕事を止めて呑気にしているのに, なんと精が出ることと嘲笑した. そのとき蟻は黙っていた. やがて冬になり, 大雨で牛糞が流され, 甲虫は飢えて食べ物もの乞いに蟻のところへ行った. 「私が精出しているとき, 甲虫さんは私を非難した. あなたが働いていたら, 今食べ物に事欠かなかったでしょうに」と言ったと.

訓蒙: このように盛んなときに将来のことを考えない人は, 時節が変わったとき大変不幸な目にあうものです.

②冬の季節に蟻達が食料を乾かしていた. 蟬が飢えて食物を求めた. なぜ夏に食料を集めなかったか, と蟻達は言う. 暇がなかった. 調子よく歌っていたと. 蟻はあざ笑って, 夏に笛を吹いていたのなら, 冬には踊りなさいと言った.

訓蒙: 苦痛や危険に合わぬため, 人はあらゆることに不用意であってはならないことを明らかにしている. 甲虫とその環境, 蟻とその環境の異なった背景がそれぞれ描かれている.

ほとんど同類の内容と訓蒙を持つ話が, 95話前後しながら掲載されている.

6) 栗野忠雄譯述『伊蘇普物語 直譯講義 全』は「原名『イソップス, フェーブルス』ト題シタ往古希臘ノ名士伊蘇普氏ノ物語を集録セシムルノヲ譯シタリナリ」と序文に述べている. しかし, いずれの国の英訳であったかは定かでない.

題名: 蟻及蝻 (THE ANTS AND GRASSHOPPERS)
筋立て: Grasshopperだから, イナゴでもキリギリスでもバッタでも良いと思うが, 本文中では訳が漢字表記の「蝻」であるがゆえに「イナゴ」「ハタオリムシ」の類ということになろうか.

蟻と蝻は広い野原に住んでいた. 蟻はせっせと働くが, 隣人のキリギリスは遊興にふける. 霜が降るころキリギリスの楽しみはなくなったが, 蟻は穀物を干したりして立ち働く. 飢えたキリギリスが物乞いに訪れ, 少し食べ物を貸してくれ. 来年の今頃に屹度返すから. 蟻はキリギリスに過ごした夏の行動を問う. 空腹も忘れキリギリスは, 日がな一日歌っていたと. 蟻は途中で言葉を挟み, 冬もいかがです, 踊って暮らすというのは, と皮肉って仕事にせっせと精出した. そして, 私どもは借りることもしない代わりに, 貸すこともしないと蟻は歌ったと.

訓蒙: 楽は苦の種, 苦は楽の種と云て, 初めに苦労して働けば後に幸福を得られる. 気楽に遊べば後に苦労をする. 若い時に蟻のように勉強し年を経てからキリギリスのように貧苦に陥ないことを心掛けよ.

以上, 6種類の型に分類できる.

4. 明治期発刊書の検証

特異な表現で代表的なものについて記し, そのジャンルに属する話をひと括りとした. 次に代表話を中心に分析を試みる.

事例1 / 福澤英之助『訓蒙話草上』1873 (明治6) 年

①題名: 蟻ト蝻ノ話

「蝻」は本来コオロギの意を持つ漢字であるが, ここでは「キリ〜ス」と片仮名表記でルビがふってある.

②筋立て: 最終行「終ニ少シノ食物ヲモ與ヘザリシトゾ」(傍線筆者)として蝻に食物を与えるところがある. これは天草本イソポのハプラスに属する. しかし, 本文は天草本より簡潔に描写されている. しかも, 天草本であるが題名が蟬ではないので見紛いそうである.

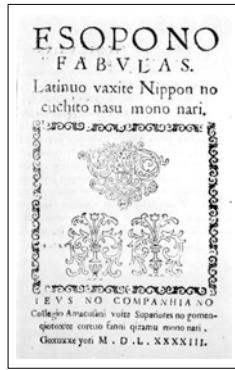


図1 天草版伊曾保物語（イソポのハプラス）

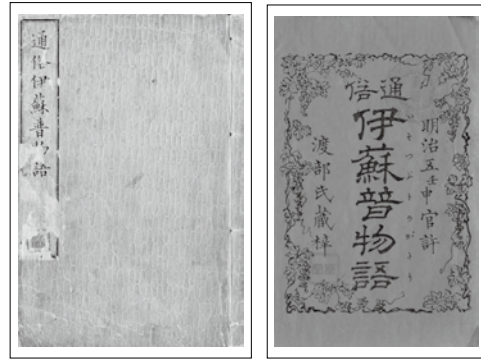


図5 渡部知新蔵『通俗伊蘇普物語』



図2 古活字本 伊曾保物語

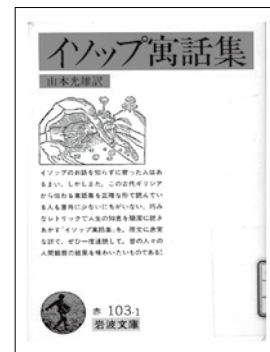


図6 山本光雄訳『イソップ寓話集』

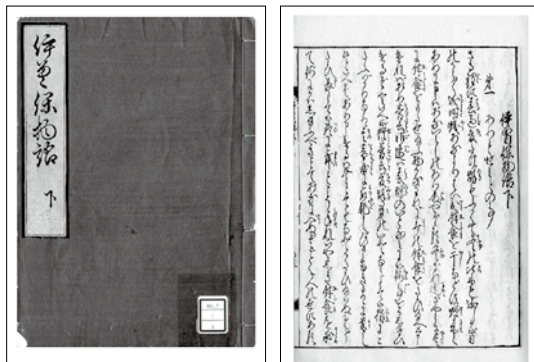


図3 萬治版 伊曾保物語下

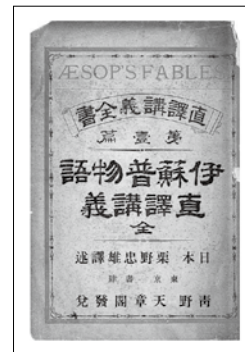


図7 栗野忠雄譯述『伊蘇普物語 直譯講義 全』



図4 武藤禎夫『絵入り伊曾保物語を読む』

③訓蒙は天草本の一部と類似しているが、より強力な訓蒙が加味されている。例えば「難澁ヲ受ケ終ニハ餓死スルニ至ル實ニ愚ノ甚シキナリ」「今ヨリ奢ヲ熄メ無益ニ光蔭ヲ費スコトナク…」と説く。

④当話には挿絵はないが、91話掲載中3～4話に1枚の挿絵が挿入されている。絵は写実的で全く擬人化はされていない。

天草本類話はこの1話のみである。

事例2／大久保常吉『伊曾保物語』1885（明治18）年

①題名：ありとせみの事

平仮名、片仮名、漢字交じり表記である。

②筋立て：古活字本と同じである。

③訓蒙も古活字本と同じで、最後の行「返寿〜もこ連をおもへ」の念押しも記されている。

④当該話の挿絵はないが、他の話では挿絵が3〜5話に一枚入る。擬人化されて胴体や手足の指は人間そのもので、首から上が鹿や鶴といった動物を描く。この話の類話は他に2話存在する。

事例3／田中達三郎譯『伊蘇普物語』日進堂 1926
(明治21)年の話は、渡部本とほとんど類似した話である。

①蟻と記りぐ須の話

②筋立て：炎天下に背を曝して…など渡部本に同じだが、「夏の間歌て暮した様な馬鹿なれハ、冬ハ喰ずと踊て居て餓死がいゝ」とし、餓死のところに「くたばる」のルビがふられていて、徹底的に怠惰を拒否する姿勢が窺われる..

③訓蒙・挿絵共になし

訓蒙や挿絵なしで渡部本の類話が上記以外に2話ある。さらに英語表記で、河島敬蔵註譯『伊蘇普物語註譯』大倉書店が1903年に出版されている。英語表記はほぼ統一した1つの型があるが、それに比類しないので特異なものと思われる。

この他に2話存在する。

事例4／菅野徳助 奈倉次郎譯註『青年英文學叢書 伊蘇普物語』東京三省堂 1911は、まさに上述事例③特異なものと同相する形で、英語表記のものとして栗野忠雄譯述『伊蘇普物語 直譯講義 全』天章閣 1897と同じである。これの他に2話確認することができる。

「GRASSHOPPERS」だが、1話は「蟋蟀」で、あとの2話は「蟋蟀(きりゝすのルビあり)」, 蝻(きりゝすのルビあり)と表記されている。

当時の語学学習書として、話材としても興味を持たせ易く、訓蒙の役割も同時に果たせる教材として役割も大きかったのではないだろうか。

事例5／西京奮雨樓校注『十錢文庫 伊曾保物語』百華書房 1911の話は、掲載内容において「萬治舊板伊曾保物語上・下」と目次表記があり、実質そのよ

うに構成されている。

題字：ありとせみの事

筋立ても訓蒙も萬治板と同じである。挿絵はない。これは当該書1話のみである。

事例6／中田敬義譯『伊蘇普言全』1879か。

題名：蟻戒○蝻

漢文表記で、書き下し文はないが判りやすい表現で記されている。

「眠花宿葉, 口含甘露,」などの表記から渡部本に近い筋立てと思われる。

訓蒙もあって、やはり渡部本に近似している。

是は本話のみである。

事例7／上田萬年解説 梶田半古差挿画『新譯伊蘇普物語』鐘美堂 1907の「蟻と蝻(きりぎりす)」と題した話は、渡部本に似てはいるが、意識が加えられ、子ども読者を意識化に訳したのではないかと思われる。

また「今餓死(うえじに)しても恨まない筈だ」という表記から見ても、渡部本に近似している。

これに最も近い話が他に1話存在する。

5. 明治期話の比較考察

以上のように明治期に出版された書を比較した結果、次のようなことが確認できた。

登場者の蟻に対して怠け者として対比される虫は、天草本、古活字本、萬治板の系列に共通するのがセミであった。しかし日本では渡部本やその後出版された本に共通するキリギリスが一般的である。

漢字表記に置いても「蟋蟀」「蝻」「蝗」など本来区別した読み方があるはずの文字に、例えば表記は蟋蟀でもキリギリスとルビがふられていたりして、怠け者の代表として祭り上げられたようだ。

これは武藤氏によれば、「気候が温暖な地中海沿岸のギリシャなどでは、夏場に鳴く虫として、身近なセミを出した」と。しかし「中・北欧ではセミにはなじみがないので、その代わりにキリギリスを登場させた」という。その意味から対比すると、確かに明治の渡部本から後にはほぼキリギリスが頻出することが分かった。

プロットの中で際立っている話として、「物乞いす

るセミに食べものを与えて戻らせた」いう人情の厚い扶助の精神を説く話がある。この期には1話のみであったが、天草本（イソホのファブラス）は宣教師たちの力によるところが大きいはずなのに、日本人の情の深さを克明に取り入れた話で大変興味深い。

結末に「餓死する」文章を挙げている話、すなわち渡部本に範を求めた話では「『うえじにする』『くたばる』がいい」といったルビによる読み方を通して、怠け者に対する強調した戒めを説く部分が目についた。

イソップの寓話は当時の教科書「読本」にも多数登場するほど日本人気質にフィットした話と考えられるので、子ども向けに翻案した話がたくさん存在すると仮定していたが、1話に留まった。

巖谷小波譯述『イソップお伽噺』三立社 1911 がそれである。

先ず当該書を紐解く最初の「諸言」に、再話・翻案をした理由を「興味を添へる爲には、決して原文に拘泥せず、所々に潤色を加へ、又順序も前後させ、話数も省略してある。」とし、再話や翻案ではなく「潤色」の用語で意図的に再話を試みた背景を記しているのである。さらに、「イソップお伽噺」としたのは、「強い新しがった譯ではない。蓋しファーベルは比喩談でこそあれ、物語と云ふべきものではあるまい」と最初の本訳書に従順であるべきでないと評する。次いで、訓を先に、お話を後にした訳は、「まづ訓戒を説き、後に談柄を述べる事にした。…菓子の後に菓を與へるより、口直しの菓子を豫約して、先に菓を與へる事の、却って効驗のあるをしったから」など理屈で説くような解説を用意し、「新譯」というより「新篇」として世に出すことを試みたなど明快に記す。

話の題名は「後の支度（蟻と蝨）」と訓蒙のキーワードを初題名とし、文字のポイントを落して原題を付す手法で始まる。文面は「蝨は頭を搔いて『イヤお恥ずかしい次第です……』』という具合に、キリギリスの態度や心境を表現して読者に身近に想像を巡らせられるよう配慮しているなど、巖谷小波らしい姿勢を窺い知るところである。

明治期には明確に絵本と称する書はなかった。巖谷のように1話に1枚の挿絵が施されているものは1冊のみで、数話に1枚の絵が大半を占めていた。その挿

絵も ①リアルな虫そのもの2話、②リアルな虫だが、人間のように杖を持って立ち歩く立ち姿のもの1話、③半獣半人で体軀は日本の武将、首から上が動物そのまが3話であった。

挿絵を施した話は、どちらかというと子ども読者を意識化に置いた著作といえよう。描画に置いても訓蒙足らんとする凛々しい武将の姿から、生き方を導いているようにも考えられる。挿絵として大変特異なのが図8のごとく、前述の武藤禎夫『絵入り伊曾保物語を読む』¹¹の挿画である。



図8 『絵入り伊曾保物語を読む』中『絵入教訓近道』「蟻とセミのはなし」の場面

町人風の老若男女の人間の頭上に小さな蟻が止まるように描かれている。セミなどは遊び人風な若者の頭上に手足を踏ん張ってしっかりとつかまっている様相で、擬人化したとはいえ、江戸期の戯本のごとく滑稽さが滲む。読者は子どもと限ったものでないこともこれで分かる。

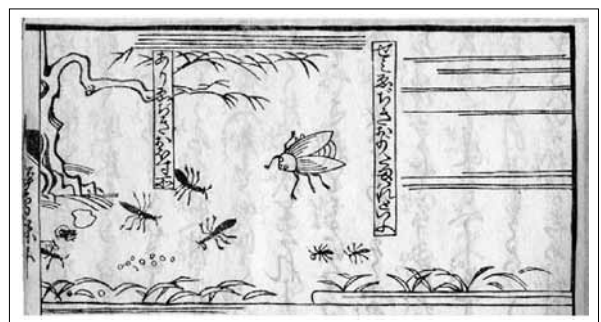


図9 萬治板 伊曾保物語¹²

萬治板では写實的蟻と蝉が地に這い、物乞いの場として描かれる。蟬の大きさに近い蟻の描写が話の内容にアプローチし風刺にも似た描き方と見受けられる。

しかしながら、『絵入教訓近道』の描写と対比してみ

ると、余りにも稚拙さを感じる挿絵というような判断もできよう。

6. 大正期発刊書の検証

大正期も明治期と同様に特徴的な話に限って事例展開と分析を試みて、類似話は数に示す。

事例1 / 『ASOP'S FABLES 英文対照イソップ獨習』岡村書店 1913¹³

前述分類6) に則った話である。そして、訓蒙と解釈できる「We ants never borrow ; we ants never lend. (僕等は借るのが嫌だ、僕等は貸すのが嫌だ)」, または、「我々蟻は借りもせぬ、我々蟻は貸しもせぬ」で締め括られる。

明治期と同じで、英語学習用テキスト的な要素をもつ本では、一般的に原文が同一のものを使用しているようであり、同一話で展開されることが多い。

「今、餌を貸してくれれば来年の同じころ返す」という一方的な約束を臆せず訴えるキリギリスの態度、そこを見抜いている蟻は決して人情を絡めた扶助の態度では臨まない。交換条件の対象として不適格なキリギリスと対峙させることで、教訓の意識が高まることになる。これは底本に基づいた類話の中で最も読者の心象に残るところであると考えられる。3話の話が認められる。

事例2 / 野田桂華『イソップ物語』岡田文祥堂 1922¹⁴
題名:「蟻と蟬」

筋立て: 天草本、古活字本などに登場する蟬でありながら、内容展開は渡部本にも類似しており、さらに結末がいずれでもない展開の仕方をしている。餓死は渡部本などに推測できる展開でみられるが、

これには「蟬はトー〜飢死をして仕舞ひました」で締め括られる。これは古関八州子『カナイソップ』¹⁵においても

「食モノガ ナイタメニ、サムサニ マケテ 死ンデ シマヒマシタ」

とあり、言及するまでもなく結末の締めくくりも同様餓死を余儀なくされる展開である。片仮名書きで分かち書きであることから、子ども読者用に設えた著書であることが分かる。

訓蒙は渡部本のごとき内容でこんこんと説得が続く

のが野田桂華で、古関八州子には訓蒙は見られない。訳者の揺るぎのない明確な信念が見て取れる。

この様な展開に類似した話が3話見受けられる。

事例3 / 楠山正雄譯『イソップ物語』富山房 1916¹⁶

当該書は題名も筋立ても渡部本に類似しているが、言葉遣いの表記がべらんめえ口調というか江戸っ子気質で「気風のいい旦那さん」的イメージが成り立つ。「ぢやあ聞くが……一體何をしていなすつたね。」「集めては置かなかつたのですかい。」など、各所にこれらの表記がみられる。

これに類した話は他にない。

事例4 / 小柳一蔵『寓話詩全』瑞柳書院 1918¹⁷

題名は「蟻及蟋蟀」で漢詩で描写する。返り点など付されており五言絶句で、漢字の特性である意義が字句そのものを見るだけで物語にアプローチできる。

日本で出版されているが、中国など国外植民地へも導入されたものであろうか。漢詩は1話のみである。

7. 大正期話の比較考察

まず、書名が明治期より「イソップ」表記が増えたことである。「伊曾保」でも「伊蘇保」でもなく、片仮名表記で外来語表記になった。外国との交流が深まり、新時代への歩みが感じられる。

英語表記、すなわち語学用テキストの存在が目立ってきたことも、時代の流れが解読できることの事例である。同様に、明らかに子ども読者用として準備されたイソップ寓話の発刊が増したことも日本の進展の歩みを感じる。

この時代絵本として出版された本は検索できなかった。挿絵のみであるが、1話に1枚の挿絵が挿入された本も数冊に上り画期的な文化水準の向上を感じ得る。

図10から図12は大正年間の年代順に載せてある。1枚絵を比較すると、いずれも蟻とキリギリスの対話部分が描かれている。しかし、図13は雪の積もった森で餓死してしまったキリギリスの死体を描写する。これを残酷と解釈するか否か。生存競争の厳しい世の中で生き抜くために成すべきか否かによっていかなる行動が必要かをさし示す範例とも考える。成さざるものは自業自得、結果は無残な姿に帰着するということ

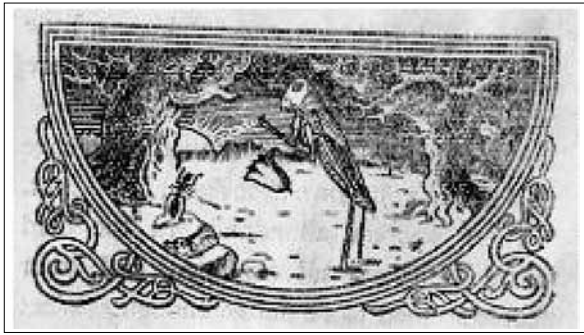


図10 C.STICKNEY『Asop's Fables』英語研究社¹⁸



図11 楠山正雄譯『イソップ物語』富山房

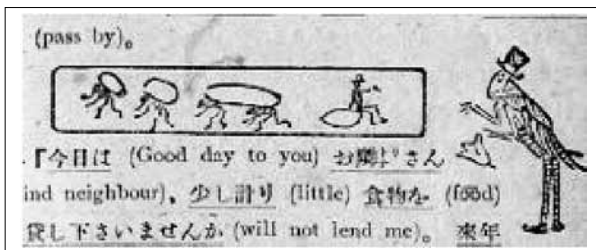


図12 紀太藤一譯註『イソップものがたり詳解』集文館¹⁹



図13 西垣堯則『新譯イソップ物語二百話』立川文明堂²⁰

であろうか。

本そのものがポケット版サイズで（例えば縦14cm, 横9cm）挿絵も大変小さいもので線画が中心であるが、精密画も見受けられページ内で割合よく配慮された画となっている。

8. 訓蒙について

訓蒙といっても、長文で篤くと教え込む文章から、格言のごとく一言で強調するものまであった。

例えば、

- ・稼ぐに追いつく貧乏なし
- ・将来のために計れ
- ・働いておかねば後に楽にはなりません
- ・末の準備を怠るな
- ・苦は楽の種
- ・金借りに行くは、憂いを取りに行くなり
- ・何事も苦勞を先にせよ
- ・楽をして儲けようと思うな

など、かけ離れた異質な訓言はなかった。

文章を通して説くものとしては、

- ・苦痛や危険に合わぬため、人はあらゆることに不用意であってはならない
- ・勉強せねばならぬ若いころや、働き盛りの壮年の頃に、余裕があるからというてブラブラ遊んでおってはこの蟬のような運命を見ねばなりません。
- ・人は力が尽きぬうちに自分の生業を務めること。豊かなとき儉約しておかないと貧しくなったとき後悔する。幼少期（子ども時代）に学んでおかないと、年をとってから後悔する。酔って乱れてると、醒めたとき更に後悔する。

などである。

時代を超えて対比すると、底本に忠実に訳されたものは共通の訓蒙で表記されていることが分かる。ただし、訓蒙の部分にあっては訳者の主張も含めて意識していることもある。

総じて、本の構成上ページ数の節約やページの跨り具合から長短を余儀なくされたと思われるものもあった。意味合いから訓蒙が異質に解釈されることは、当該話ではなかったことが判明した。

寓話の本質から考察すると、どのような条件であれ

この訓蒙を書き記すのが役割と考える。その点で9割はその使命を果たしていたと判断した。

9. 総 括

表記に関して共通しているのは、英語表記を除いてすべての話の漢字表記にはルビがふられていることである。単に「子ども層」だけではなく、今日と異なり識字率の低かった時代ゆえ、多面的読者層のことを考慮してどのような立場に置いても物語を鑑賞できるように配慮していると判断した。

文章の末尾表現は敬体、常体のいずれも見られた。これは翻訳者の言葉遣いや読者層への配慮などがあって、それぞれ異なっていて良いと思われた。

最終的にチャンブリ版に近い話はあったが、それと確認できるものは1話も存在しなかった。これは昭和期に期待するところである。

描画による稚拙さな文章の改竄などはなく、翻案の要素の濃い話は、翻訳者が意図的に「潤色」して子ども読者にアプローチしたことが判明した。時代的背景、社会の動静と比例しその変遷が見えてきた。

引用文献 参考文献

- 1 日本古典全書『切支丹文學集下』朝日新聞社1960、並びに、日本古典文学大系『假名草子集』岩波書店1965に基づく話の題名
- 2 中務哲郎『イソップ寓話の世界』筑摩書房1996 pp. 21-25
- 3 この『天草版 伊曾保物語』は、勉誠社文庫3の複製で、新村出・柊源一校注 日本古典全書『切支丹文學集下』朝日新聞社1960や新村出『天草本 伊曾保物語』岩波書店・岩波文庫1940のイソポのハブラスにも準拠する。
- 4 この『古活字本 伊曾保物語』は、勉誠社刊の小堀桂一郎解説『大学古典叢書7 古活字版 伊曾保物語』1986、中川芳雄解説『古活字本伊曾保物語 国立国会図書館蔵本影印』1994、及び、前田金五郎・森田武校注『日本古典文学大系90 假名草子集 伊曾保物語』岩波書店1965に準拠する。
- 5 この『萬治版 伊曾保物語』は、稀書複製會が1925(大正14)年に 原本早稲田大学図書館蔵のものを複製し、『伊曾保物語上 中 下』で刊行したものである。原本には、序文、跋文、さらに訳者も未詳のようである。
- 6 武藤禎夫『絵入り伊曾保物語を読む』東京堂出版1997 pp.65-68 これは『絵入教訓近道』1844を出版したものである。

- 7 渡部知新蔵・解説『通俗伊蘇普物語卷之一』渡部知新蔵1872
- 8 この山本光雄訳『イソップ寓話集』岩波書店(岩波文庫)1942については、山本氏はギリシア原文によるとして解説に明記している。当該書と同一内容・訳書として他に、二宮フサ訳『イソップの寓話』白水社1971や塚崎幹夫訳『新訳イソップ寓話集』中央公論社(中公文庫)1987などがある。そしてこれらは今日巷では「チャンブリ版」という通称で原文の一つとして掲げられている。
- 9 栗野忠雄譯述『伊蘇普物語 直譯講義 全』天章閣1897は明治期に語学テキストとして使用されたものと考えられるが、英語表記の原文が掲載されていない。
- 10 6前掲書pp. 66
- 11 前掲書6に同じ
- 12 前掲書5に同じ
- 13 『ASOP'S FABLES 英文対照イソップ獨習』岡村書店1913は、訳出者名は不明で著作兼発行者名が岡村庄兵衛と付される。また、表紙記載の出版社は「SEIKADO(精嘉堂か)」とある。
- 14 野田桂華『イソップ物語』岡田文祥堂1922は結末の持ち方が「飢え死」の表記としてある代表例とする。
- 15 巖谷小波監修・古関八州子著『カナイソップ』第一出版協會1922
- 16 楠山正雄譯『イソップ物語』富山房1916
- 17 小柳一蔵『寓話詩全』瑞柳書院1918
- 18 C.STICKNEY『Asop's Fables』英語研究社1914
- 19 紀太藤一譯註『イーソップものがたり詳解』集文館1917
- 20 西垣堯則『新譯イソップ物語二百話』立川文明堂1920